

「東北文化の日」フォーラム 開催報告

本稿では、昨年10月26日に仙台市福祉プラザで開催した「東北文化の日」フォーラムの概要を報告する。

1. 「東北文化の日」について

東北6県と仙台市では、平成22年度から毎年10月最終土曜日およびその翌日の日曜日を「東北文化の日」とし、東北の特色ある文化に関する情報を一体となって発信していくこととなった。これは、地域文化に光を当て、東北全体の文化力の発揮を目指すとともに、文化施設を基点とする圏域内外の交流人口の拡大を意図としたもので、「東北文化の日」推進委員会(事務局：宮城県消費生活文化課)を立ち上げ、「東北文化の日」推進事業に取り組んでいる。本年度は、東北の文化施設に関する情報を発信するウェブサイトを開設したほか、10月30日から11月28日までの事業期間中、趣旨に賛同し事業に参加した施設による無料・割引展示や、各種イベント等が行われた。

2. 「東北文化の日」フォーラムの開催

当センターでは「東北文化の日」制定を記念し、同推進事業の趣旨を踏まえ、東北圏域が有する多様な文化資源を掘り起こし、その価値や魅力を高め内外に発信していくための方策と文化施設の役割について探ることを目的に、「東北の文化をつなぎ、活かす」をメインテーマとした本フォーラムを、「東北文化の日」推進委員会との共催により開催した。

3. フォーラムの概要

【プログラム】

○基調講演「知を活かし、地をつなぐ」

[講師] 赤坂 憲雄氏

(東北芸術工科大学東北文化研究センター所長・福島県立博物館館長)

○調査報告

「文化的資源を活用した地域活性化」

[報告者]

木村 和也

(財団法人東北活性化研究センター主任研究員)

○パネルディスカッション

「東北の多様な地域文化を育み、伝える」

[コーディネーター]

宮原 育子氏

(公立大学法人宮城大学事業構想学部教授)

[パネリスト]

寺井 良夫氏

(株式会社邑計画事務所代表取締役)

江花 圭司氏

(特定非営利活動法人まちづくり喜多方代表理事)

針生 英一氏

(ハリウコミュニケーションズ株式会社代表取締役)

以下では、上記プログラムのうち、木村主任研究員による調査報告とパネルディスカッションの概要を紹介する(基調講演については別掲)。

知を活かし、地をつなぐ

東北芸術工科大学東北文化研究センター所長
福島県立博物館館長 赤坂 憲雄氏



こんにちは。「東北文化の日」という日が制定されましたが、僕自身はまさに文化をよりどころとして地域のために何ができるのかを考えてきたので、文化がこういう形で脚光を浴びる時代が訪れたことは大変感慨深いものがあります。

半世紀も前の東北は、そこかしこにおしんの世界が広がり、寒い、暗い、貧しいということが否定しようもない現実でした。けれども、僕が聞き書きのために東北の村々を歩き始めた1990年代の初めには、既に東北は貧しくなく、経済的には十分に豊かな世界が広がっていました。にもかかわらず、貧しさの幻影だけが社会の根っこのようなところに絡みついている。とりわけ高齢の方たちにはそういう印象がありました。

それから20年近く、ひたすら東北を起点にして日本や世界を眺めてきて、そして今、幾らかの希望を込めて、東北は自らの文化を持って立つべきだ、戦うべきだと僕は思うのです。

生活や生業に根差して、その地の歴史や風土や自然とかかわりながら、さらには旅や観光といったものとも交わりあらわれてくる、何か大きなもの。それをとりあえず「文化」と呼んでおきたいと思います。

文化施設の役割

文化は常に“金食い虫”だといわれます。僕は福島県立博物館の館長もしていますが、館長

になってからの8年間で運営予算は半分に減り、昨年などは予算がほぼゼロでした。文化施設にとって予算が減るといのは大変なことですが、僕はむしろチャンスだと感じ、年の初めに学芸員やスタッフに「運営予算がほぼゼロの状態では何をなすのか」ということを問いかけたんです。1年寝て暮らすわけにはいかない。自分たちが蓄えてきた知恵とノウハウを駆使して、お金がなくてもやれることをやってみようよと。

スタッフは実に見事に働いてくれました。本来、企画展もお金がなければできませんが、地域に埋もれている文化資源を掘り起こして自然系の展示をしたり、会津の漫画文化を掘り起こすといったことを徹底してやりました。それが評価されて、随分風向きが変わってきました。後ほど触れますけれども、この秋、会津では「会津・漆の芸術祭」という大きなイベントを展開しています。それもこれも、我々が必死で県立博物館のこれまでのイメージを壊しながら、新しいステージに立つためのささやかな努力を重ねたその結果だと思っています。

いずれにしても、現代は、文化こそが地域の活性化の鍵であるということがさまざまな成功事例とともに注目されつつある時代なのだと思います。今、文化芸術創造都市といった、地域に固有の文化資源を地域の活性化のために活用するという考え方が提示、提起されています。

ある意味では、僕が尊敬している社会学者の鶴見和子さんの内発的発展論の応用編だろうと思います。地域には歴史があり、文化があり、風土がある。その固有の条件に根差しながら、それぞれの地域が社会の活性化のスタイルをつくっていく。それが鶴見さんの内発的発展論だったと思いますが、そうした考え方が当たり前になっている気がします。

僕は、県立博物館という文化施設がどんな役割を求められているのかをずっと考えてきました。1970、80年代から日本全国にたくさんの博物館や美術館や文化施設がつくられた中で、博物館の役割は、ものを集め、調査研究し、展示することだと固く信じられてきました。けれども、21世紀を迎えて、もはや博物館の役割がそうした狭いところに閉じ込められていては地域の方たちの支持が得られないということに気付き始めています。そのときに、僕は博物館の外の人間なので、博物館や美術館が地域の文化の交流の中心として何か役割を果たすことができるのではないかと考えますが、博物館の中からはそういう考え方は決して出てきません。そういう問題提起をすると、そんなことは学芸員の仕事ではないという答えが返ってきます。古い文化施設のイメージにとらわれており、とりわけ専門的な能力の高い人たちがそういう抵抗をします。

我々の博物館では2、3年前、会津の伝統文化である東山温泉の芸妓衆を20人程招いて、歌と踊りの催しを行いました。僕はそのとき、博物館で芸者とは何だと批判が出るだろうと予想していましたが、意外にもその場にいた二百数十人の方たちが皆さん喜んでくれたのです。70代のおじいちゃんからは「こんな楽しいものがあるなら毎月やってくれ」と言われたのですが、そんなお金がないんですよ。そのときも、市の経済関係の方たちと連携してやっと実現に

こぎつけました。でも嬉しいことに、それ以降、東山の芸者さんたちが昼のイベントなどで芸を披露する機会が増えたのだそうです。

今、博物館はこの大きな社会の変容の中で、自らの役割をどのように社会に向けて発信していくのかということを問われています。今回の「東北文化の日」という言葉の背景にも、そうした文化をめぐる状況の変化が影を落としているに違いないと思います。

文化を糧に

文化が経済から切り離されるのではなく、文化こそが経済の活性化のために大きな役割を果たすことができるという時代が始まっています。文化は生活や生業に深く根をおろして、そこから養分をすい上げながら育てられてきたものだと思います。芸術や絵画や音楽、演劇やダンスだけが文化ではありません。

関西から来たお客さんが車窓から見える東北の風景を見て感嘆し、「東北には本当に雄大な豊かな自然が残っていますね」と褒めてくださる。そのとき僕は「いや、それは違いますよ。自然が残っているとあなたがご覧になった風景は、縄文以来の1万年の時間の中で、東北に暮らす人々がかかわり、つくってきた文化としての自然なのです」と語りかけてきました。東北の雄大な自然は“残っている”のではなくて、東北の人々が自らの暮らしや生業とかかわる文化として“つくり、守り、育ててきた、残してきた”のだというふうに考えるべきではないかと。

白神山地に象徴されるように、東北の美しいブナの森は今では大変価値のあるものとされています。でも、「樺(ブナ)」という漢字そのものが、無用の木である、役に立たない木だという、そういう意味合いを含んでいるんです。今、ブナの森が東北の豊かな地域文化の結晶のようになりつつありますが、白神山地のような原生

的な自然は、東北の自然の1割程度だといわれています。逆にいえば、9割は人間が深くかわりながら守り育ててきた、文化としての自然なのだと考えた方がいいのだと思います。「里山」が生物多様性を守る、保全する現場として注目されていますが、人間たちが少しだけかわり傷つけた自然が、多様性の豊かな自然として存在できるという、不思議なことがあるのだと思います。

我々の周りに見出される自然や風土や歴史、それらは皆、かけがえのない文化遺産であり地域資源であります。それを糧として、あすの地域社会を豊かにデザインしていくことが求められているのだと思います。文化の担い手は、出稼ぎ知識人として時々やってきて高尚な文化を語り説く人たちではなく、地域社会とそこに生きる人々です。そこに暮らす人たちこそが文化の担い手であり主人公であるという当たり前のことを、何度でも確認するべきだろうと思います。

観光のイメージも随分変わりました。表層を上滑りするような観光というものは間違いなく飽きられつつあり、もっと深い文化や歴史の底にたゆたうものに触れてみたいという欲望が芽生えつつあります。地域に暮らす人たちが自らの地域の文化に誇りを持ち、その文化を糧としてよそから来る人たちを迎える。そういうスタイルが当たり前になっています。

宮沢賢治が試みたこと

宮沢賢治は今では聖人君子のように持ち上げられています。明らかにその人生は挫折と失敗の連続でした。結核で早く死んでゆき、生きている間に彼の作品が高く評価されたわけでもありません。ですから、賢治の死後数十年を経て起こった賢治の再評価の動きというのは、賢治自身は知る由もなかった。

賢治はイーハトーブという理想郷のようなイメージを現実の厳しい岩手にかぶせて、文学的に造形してみせたと思います。目の前には、冷害と飢えにあえぎ苦しむ、貧しくて暗い岩手がある。でも、それをイーハトーブという理想郷として劇的にひっくり返すために、その文学的な営みがあったのかもしれない。

賢治の作品を読んでいると、たくさんの老人たちに聞き書きをしています。昔からの暮らしとか生業、さらに伝承といったものに賢治は耳を傾けている。『なめとこ山の熊』という作品がありますが、「なめとこ山」という地名を残したことは我々の時代への贈り物となりました。研究者たちが「なめとこ山」というのが賢治の命名ではなくて、明治の地図に名前が残っている地名だということを発見し、今ではその山に登る人たちもいます。土地が名前を持つこと、それは、その土地の持っている記憶がその地名に結晶しているという意味でとても大切なことです。記憶を掘り起こし、土地に名づけを施す。そして、それにまつわる物語をつくること。賢治は土地につながる物語を数知れずつくりました。その物語があるために、今岩手を旅する人たちは、何げない風景がとても豊かに立ち上がってくる瞬間に出会うことができる。

『狼森と策森、盗森』という作品の舞台になったといわれる開拓の村を僕は何度も訪ねました。山の神の神社の境内から見る岩手山の風景が僕はとても好きなんです。賢治の作品がもし存在しなかったら、我々はその開拓の村に行っただろうか。そうしてそこから、風景を眺め、物語に思いをはせ、その土地の記憶を掘り起こすといったことをしたのだろうか。イーハトーブに惹かれてたくさんの観光客や旅人が岩手を訪れています。莫大な経済効果だろうと思いますし、そこから恩恵を得て暮らしている人たちもたくさんいるだろうと思います。目の前に横た

わっている岩手の風土を詩的な場所に仕立て直す。そういう賢治の壮大な試みは成功したのかもしれませんが。

遠野物語

今年『遠野物語』が生まれてから100年を迎えました。遠野市ではいろいろなイベントや試みを始めています。「民話の里遠野」ということで、民話と観光をつなぐという大きな戦略で地域おこしを進めてきました。博物館、とおの昔話村、伝承園、遠野ふるさと村といったものを次々につくって、遠野物語や民話というものを起点とした地域づくりを行ってきたんです。遠野には随分通っていますので、少しだけ知っているのですが、ついこの間まで遠野の人たちは遠野物語が嫌いでした。遠野物語を読んでいると、次から次に出てくる人たちが死んだり、殺し合いをしたりしている。こんな暗い物語で遠野が語られるのはたまらないということで、遠野を出た人たちが遠野物語を知らない、拒んだ、そんな話を繰り返し聞きました。

初めて遠野を訪ねた20数年前、たまたま乗ったタクシーの運転手さんも当然のように遠野物語を知りませんでした。かっぱが出るというある場所に連れていってもらって、写真を撮っていたときに、僕の後ろで運転手さんがつぶやいた言葉を僕はいまだに忘れられません。「こんなところでかっぱなんか出るわけないよな」と、彼は確かに言いました。確にかっぱなんか出そうもないところなんです。でも僕は、遠野物語があって、その土地があって、そこに立って、かつてここに暮した人たちがそこでかっぱに出会ったのだというその幻影のような記憶を反すうしていたんですね。だから、その運転手さんが先ほどのせりふではなくて、例えば「ああ、かっぱならね、うちのばあさんの実家のそばの川でも出るらしいよ」と、こんなふうにつぶや

いていたら、僕は大喜びしてその場所に連れていってもらったと思います。そして次に来たときには友人たちをその秘密のかっぱの川に連れていきます。そういうことなのだと思います。

その土地に暮らす人たちこそが、その土地の歴史や文化や風土を知らなくてはいけない。知っていることによって語り部になる。豊かな語り部は、1人に語ることをきっかけに、たくさんの方の観光客や旅人たちをその土地の深いところにいざなってくれます。今ではそんなことは当たり前になっていて、遠野ではタクシーの運転手さんたちに遠野物語の講習会が行われていると聞きます。そして遠野では、遠野物語100周年を契機に遠野文化研究センターが立ち上げられます。これからは遠野に暮らす人々を主人公として、新たなもう一つの遠野物語をつくる、そういう時代が始まることでしょうか。旅や観光がどんな形で地域づくりにかかわることができるのか。遠野で僕がいろいろ体験してきたことは、まさにそういうことだったような気がします。

逆転の発想

古めかしい伝統こそが新しいという、逆転の発想が必要なのかもしれません。その一例として伝統野菜の復活があります。スーパーに並んでいる野菜は日本全国規格が統一され、品種も極めて限定されたものになっている。けれども、東京で僕が行くスーパーにも京野菜のコーナーがありますが、別格なんですね。京都で伝統的につくられてきた野菜は実に美しく、それが並んでいる一角は野菜売り場の中でも輝いています。東北では山形県庄内の温海の赤カブが有名ですが、これは焼き畑という古い栽培方法によってつくられてきました。山の斜面を刈り払ってそこに火入れをして種をまくんです。そうした焼き畑という伝統的な農法の復活とともに、伝統野菜の復権ということも起こりつつある。

7、8年前、「東北学」という僕が主宰する雑誌で焼き畑の特集をやったときには、「何でそんなもう終わったテーマで雑誌の特集を組むのか」と随分聞かれました。でも、この7、8年で状況は変わり、今、至るところで焼き畑が復活しつつあります。それは、地域経済の一角を担う地域ブランドを立ち上げるといったときに、そこにしかない伝統的な農法が大きな価値を付与する手がかりになることに気付いたからだと思えます。

尾瀬が自然保護の、あるいはエコロジーのある種のシンボルのようになっていますが、その尾瀬が実は明治以降に発見された自然生態系であると知ったときには、とても嬉しくなりました。というのは、尾瀬のような湿原は人間にとっては何の役にも立たないと思われていた、足を踏み入れることのない不毛の地だったんです。だから、地図には名前すら載っていなかった。植物学者がそこで氷河時代から続いている植物が見出されることを発見して、それからそこが珍しい貴重な自然環境であるという新たな物語がつくられ、流布されていき、尾瀬ヶ原という名前が与えられた。このことは何か時代を考えるための鍵のような気がしてなりません。マイナスをプラスにひっくり返すという逆転の発想が求められています。

アート回廊

今日は一つの提案をしてみたいと思います。東北文化の日ということで、東北の文化施設が連携するという試みはとてもいいことだと思いますが、もう少し先に歩を進めることはできないでしょうか。僕は芸術デザイン系の大学にいますので、芸術とかアートにとりわけ深い関心を寄せてきましたし、そうした芸術にかかわる若い力、若い作家たちを応援したいという思いもずっとありました。

越後妻有で3年ごとに「大地の芸術祭」というイベントが行われるようになり、昨年4回目が行われました。50万人ぐらいの方が十日町近辺の里山の中に点在するアートを探して歩き回ります。東京ナンバーの小さな車に4人も5人も若者たちが乗り込んで、地図を片手にアートを探す。彼らはそこで土地の人たちと出会い、里山の風景に出会う。アートとの出会いだけではなくて、いろんな体験をしています。この10年の展開の中で、越後妻有ではレストランやミュージアムなどで100人規模の雇用が生まれていると聞きました。3年ごとの芸術祭だけではなく、年間を通しての雇用を生んでいるのです。芸術祭絡みでは数百人規模の雇用が生まれています。過疎の村が経済的に自立することはなかなか難しい。でも、そこにアートが固有の役割を持つことができるということを越後妻有は我々に教えてくれたと思います。

その越後妻有の大地の芸術祭をコーディネートしてきた北川フラムさんが、今度は瀬戸内海の直島など幾つかの島を舞台にして「瀬戸内国際芸術祭」というのを仕掛けました。そこでも50万人の人たちがその島々を訪れていると聞きました。作品鑑賞のチケットが5,000円なんですが、5,000円掛ける50万。幾らになるのでしょうか。普段はだれも乗らない船やフェリーが満杯で積み残しが出て、どこの旅館もいっぱいになかなかとれない。僕はついこの間行ってきました。直島の地中美術館はとても豊かな美術館でしたが、平日だったのに整理券をもらって2、3時間後にやっと入ることができるほどの混雑ぶりでした。

そして、今、僕自身は福島県の会津で「会津・漆の芸術祭」というものを仕掛けています。これは福島県立博物館という“文化施設”が起点になり、しかも会津の伝統文化である“漆”をテーマとする。そういう意味で、何重もの意味

での初めての試みだろうと我々は自負しています。会津若松と喜多方を中心として、100人規模の作家たちが漆を素材としたアートの展示を行っています。漆をいじったことのない現代アートの作家さんと、会津の漆の職人さんたちをつなぐことによって、おもしろいことが起こります。現代アートの作家たちは、こんなことをしてみたいと要求を出す。職人さんたちはそんなことはしたことがない。でも、何だかわからないけれどもおもしろそうだというので一緒になってやっているうちに、忘れられていた会津漆器の技術が復活してくるといったことが実際に起こっています。伝統と創造とが思いがけぬ出会いを果たす。そうして漆の国、会津が復権される。そんな姿が少し見えてきました。

今年は文化庁と県の助成をいただいておりますが、2年後には少し大がかりにして、北川フラムさんには、越後妻有とこの会津の漆の芸術祭、そして新潟市で行われている水と土の芸術祭をつながせてほしいと頼んでいます。その3つを「アート回廊」としてつなぎたいと。いずれはアート回廊として東北中のアートイベントをつなぎ、演出することができないかと考えています。何年後かの秋、東北中のミュージアムや博物館、さまざまな町のアートイベントがつながれて、北の青森から南の福島、新潟まで、つかの間そこに壮大なアートの回廊が浮かび上がる。そのとき、みちのくがアートの大地として再発見されるのかもしれない。

アートこそが地域の文化や伝統を再発見する豊かな手がかりを秘めています。よそでつくったアーティストの作品ではなくて、会津という土地で、アーティストと土地の職人さんや伝統的な文化が会うことによって生まれたものが作品になる。土地との対話が作品を生んでいく、それが今の現代アートの最前線で起こっていることなんです。

そんな妄想のような夢のようなことを僕に教えてくれたのは、岡本太郎というアーティストでした。大阪万博の跡地には今も太陽の塔だけが建っています。太陽の塔を1970年にはだれも理解しなかった。だれも認めず、変なものだとみんなが思った。でも、今になってみると、たった一つ残って、そしてアートのすごみを伝えている。アートは何も求めない。その無償性こそがかけがえのない力の源泉となる。そんなことを太陽の塔は我々に教えてくれているのかもしれない。

今回制定された東北文化の日、そしてその動きというものが、これからどのように展開していくのか、僕はとても楽しみにしています。東北ルネッサンスということをずっと語り続けてきました。それが今、もしかしたら文化というものを糧として、新しい時代の風景を切り開く手がかりになっていくのかもしれない。そんなことを考えています。

おつき合いいただきまして、どうもありがとうございました。

本稿は、平成22年10月26日に仙台市において開催した「東北文化の日フォーラム」の要旨です。
文責 東北活性研

略歴

赤坂 憲雄(あかさか のりお)氏

1953(昭和28)年生まれ。東京大学文学部卒業。専攻は民俗学・東北文化論。東北一円を聞き書きのフィールドとして、埋もれた歴史や文化の掘り起こしなどから「いくつもの日本」を抱いた、あらたな列島の民族史の地平を開くために、東北学の構築を目指している。

著書／『東北学へ』(作品社)、『東北／南北考—いくつもの日本へ』(岩波新書)、『岡本太郎の見た日本』(岩波書店)、『婆のいざない』(柏書房)、『増補版 遠野／物語考』(荒蝦夷)、近刊に『内なる他者のフォークロア』(岩波書店)、『岡本太郎という思想』(講談社)、ほか多数

パネルディスカッション 「東北の多様な地域文化を育み、伝える」要約

コーディネーター

公立大学法人宮城大学事業構想学部 教授 **宮原 育子氏**

パネリスト

株式会社邑計画事務所 代表取締役 **寺井 良夫氏**

特定非営利活動法人まちづくり喜多方 代表理事 **江花 圭司氏**

ハリウコミュニケーションズ株式会社 代表取締役 **針生 英一氏**



文化を守り創る



宮原氏

○宮原 地域のアイデンティティや誇り、郷土愛を育てていくためには、地域に住んでいる人や文化施設が主体となって、身近に存在する文化資源を掘り起こし、その価値を高めて地域内外に発信していくことが重要である。東北の文化をどのように

につくり、伝えていこうとしているのかについて意見交換をしていきたい。まずは、ご自身の活動について紹介いただきたい。

○寺井 盛岡の文化資源を活かすために、神楽

の定期的上演、盛岡芸妓を再生する取り組みや、茅葺きの民家を守る活動、町の中に馬車を走らせる活動のほか、石川啄木の生誕の場所にちなみ短歌甲子園等に取り組んでいる。また、「おもてなしプラザ」を運営し、盛岡の古い町並みが残る鉾屋町の町家を改修して無料休憩所とし、特産品等の販売もしている。

○江花 喜多方は物流に恵まれた地域で商人文化が発達してきた。喜多方の歴史、成り立ちを基幹にして、それに現代の新しい文化をかぶせるような形でまちづくりをしている。会津盆地の山裾に多くある神社仏閣を中心に「会津まほろば街道」をつくったり、喜多方で開かれていた「六斎市」にちなんで「ろくさい」という蔵を活用した直売所に取り組んでいる。また、近代化産業遺産になったことをきっかけに、煉瓦の登り窯を復活させた。

○針生 今年の3月から「地域情報編集局事業」をスタートし、地域内の情報発信の組織づくりをやっている。「地域の活動をどのように興し、そのコンテンツをどのように発信していくのか」というのが当社が追いつけてきたテーマであり、このノウハウやネットワークを自分の住んでいる地域に当てはめて活動を始めたことが、今回の地域情報編集局の立ち上げにつながっている。

文化資源を地域づくりに活かす

- 宮原 身近な文化資源に光を当てて、住民主体の地域づくり活動につなげるためには、どのようなことが大切なのか。
- 江花 地域づくりでは、歴史がマニュアルになると思う。地域の歴史を深く探ると、自分たちがやっていかなければいけないことが見えてくる。それを念頭に置いた上で、「アートぶらりー」という町中のアートの祭典や、「喜多方発21世紀シアター」という町中が劇場になるというイベントを行っている。



寺井氏

○寺井 基本的には自分がいいなと思ったものを取り上げて広めたいが、その地域で実際に取り組みされている方々の協力なしにはできない。神楽をやっている方、茅葺き民家を守っている方々と一緒に活動

をしている。伝統文化を地域の人たちにもう1回見直してもらい、よその人たちにも知ってもらいたいが、なかなかお客さんが集まらないのが悩みだ。

- 針生 地域情報編集局事業では、市民記者や市民編集者を発掘、トレーニングして、フリーペーパーやwebといった媒体を使いクオリティーの高い地域情報を発信できる組織をつくることにした。情報誌を年4回、1万部程度発行する予定である。地域課題に迫って住民の気づきを引き出すような媒体に育てたいと思っている。最終的には地域の人・組織、活動、資源を発掘し、発信することで、住民の地域に対する興味・関心呼び起こし、人と人、組織と組織をつなげていきたい。住民による新たな活動をおこす原動力となる取組みにしていきたい。

価値を発信し、持続させていく

- 宮原 文化資源の価値や魅力を高めて、発信をしていくための工夫とは。
- 針生 ストーリー性が非常に大事である。「過去、現在、未来」をどのように発掘し、取材し、載せていくのかというのがキーコンセプトである。例えば過去に関しては、仙台郷土研究会にお願いをして勉強会を行った。そこで学んだことの発表の場として紙面を使っていくといった次の動きにつながる仕掛けをつくりたい。また、国際化が進んでいるが、外国人が読めるような地域情報を提供していく中間支援的な機能も担っていきけるのではないかと考えている。
- 寺井 外の人たちに神楽を見て評価をしてもらうことで、地元の人たちに神楽に目覚めてもらえればと、今年3月、ロシアのサンクトペテルブルクという都市で神楽公演をした。2日間で4回の公演を行い、1,000人ぐらいの方に神楽を見ていただいた。ロシアの方々は神楽を非常に楽しんでおられ、神楽の意味もすんなりと受け入れてくれた。

それがきっかけとなって、日本の人たちも神楽に興味を持ってくれたようだ。



江花氏

- 江花 喜多方には、大正の最初の頃、喜多方美術倶楽部があり、「無尽」で掛け金を集め、文人画人に支援するお金として使っていた。今でいうCSRの先駆けであり、地域的に、文化の育成や文化人たちの支援を行っていた。お酒を酌み交わしながらの無尽は楽しみながら行えたようだ。まさに、みんなが参加して、みんなで作っていくという仕組みである。

- 宮原 東北全体として文化を発信していくための考え方をお話しいただきたい。

- 針生** 東北人というのは非常にシャイで奥ゆかしいので、自分たちがやっていることにあまり自信が持てなかったり、外に発信する力が弱い。自分たちの資源に気付き発掘するためには、外からの見方をうまく取り入れていくとか、ストーリー化したり、違う切り口から見せていく工夫をすることが大事である。
- 江花** 地域の資源をよく見せる、その格好よさを見出すことが大切である。身をもって、何かあると思わせるそぶりをするということも大事である。
- 寺井** 東北には、夏祭りはもちろん味わい深い祭りがたくさんある。しかし、ほとんどの神社の祭りには人が集まらず寂しい状況である。実際に地域の中に行って、昔から受け継がれてきたありのままのものをを見ていただきたいと思う。今、神楽を演じているのは、60代、70代の人が大半で、後継者に悩んでいる。しかし、子どもたちを見ていると、日本のこの伝統的な音楽、リズムにもものすごく敏感に反応している。子どもたちに地域文化を体験してもらい、何かを感じ取ってもらいたい。そして、将来は担い手になってもらえればと思う。

文化施設への期待

- 宮原** 文化施設には、展示、研究、保存のほかに、もっと動的な役割がある。今後の文化施設に期待することは。
- 寺井** やはり文化施設はかたいところがある。1年も前に予定が立っているので、急に話を持っていっても難しい。市民からおもしろい企画を出されたら受け入れて一緒に盛り上げていくことが大切だと思う。
- 針生** 我々の活動は地域の活性化支援なので、行政、NPO、企業との連携が非常に重要だと思っている。ただ、我々の活動拠点を行政施設の中に求めるというのは、非常にハードルが高い。地域の市民センターなどは、施設管理が中心になるので、いろいろな制限が加わる。市民の発案によって何か生まれる



針生氏

ということに関して、なかなか受け入れてもらえない。市民センターはまちづくりの最前線になるので、住民の発案に対しておもしろがる感性が必要である。できないことがあったらどうやったらそれをクリアできるだ

ろうかと、一緒に知恵を絞る関係性がつくれば新しいことが生まれてくるように思える。

- 江花** 地域のコミュニティがどんどん崩れている現代だが、地域にはまだ子ども会、青年会も、祭りの団体もあり、それらが地域の文化を守っている。しかし、祭りをやめたら、それを復活させるのには相当の苦労が必要である。やめる前に、なんとか続けていけるように相談できる窓口機能が文化施設に必要な。また、祭りや文化的なボランティアに参加したいという人のつながりの場になれば良い。
- 宮原** 今日のお話で、活動をされている皆さんたちが、何かを伝えたいという気持ちを大変強く持っていること、そしてその気持ちに沿っていろいろな人の知恵や教えが集まってくるのが分かった。地域の文化というのは、地域の人たちが守って、発信をしながら、そして、よその方たちと分け合いながら強くしていくものである。
東北の中で地域にある小さなお祭りを守っていきながら、子どもたちにこの文化をつないでいくということの大切さ、何かを行う時に人と人が寄り合って、資金を出し合うような仕組みが必要なことなど、東北全体として前に進める力をもっと強く持たなければならぬことを学ばせていただいた。どうもありがとうございました。

(文責 東北活性研)

調査報告

文化的資源を活用した地域活性化

財団法人東北活性化研究センター

主任研究員 木村 和也

昨年度実施した、「東北地域の文化的資源の活用による地域活性化に関する調査・研究」の報告書について、その要旨をご紹介します。また、本題と絡めてフォーラム開催の趣旨でもある文化施設の果たす役割についても少し触れてみたい。

調査の目的

本調査・研究の目的は、東北6県及び新潟県（以下、東北地域）が有する身近な文化的資源に焦点を当て、その活用による地域活性化の展開方策について明らかにすることである。また、本調査では、文化的資源を「人の手によってつくられたり、人の手が加えられたりしたもので、長年にわたり保存、継承されてきた過程において、文化として地域に根づいたもの」と定義し、その上で、歴史資源、文化芸術資源、人工資源、知的資源、風土資源、空間資源の六つに分類した。

文化的資源を活用した取り組み

これを踏まえ、文化的資源を活用した取り組みとして、東北地域に多くみられる「民俗芸能」「郷土料理等の食文化や風習・風俗等の伝統行事」「景観」「工場施設や鉱山・橋・発電所等の近代化遺産とこれらを活用した産業観光」の四つの分野に焦点を当てた。そして、「岩手民俗観光プロジェクト」や「三津谷煉瓦窯再生プロジェクト」など計20事例（地域内17、地域外3）を抽出し、その活用手法や活用による波及効果について考察した。

これらの事例から文化的資源の活用手法についてみると、以下の五つに整理できる。

- 「商品化」：体験型観光ツアーのプログラムに組み込まれたり、素材にアレンジを加えたりし、商品として売出す。
- 「シンボル化・拠点化」：文化的資源を地域コミュニティの象徴や交流の拠点・素材として位置づける。
- 「可視化」：地図、DVD、ガイドブック等を制作し、文化的資源を映像や写真、文字などの媒体に変換する。
- 「教育資源化」：子どもたちの体験学習、あるいは大学

研究者や学生たちの研究素材、フィールドとする。

- 「複合化」：複数の資源を組み合わせるなどして広域連携を図る。

活用による波及効果

文化的資源の活用によって生まれる波及効果は、「生きがい再発見効果」「主体性向上効果」「次世代層育成効果」「ネットワーク形成効果」「収益事業創出効果」の五つに整理できる。その上で、これらについて少し細かく見ていくと、具体的な動きとして以下の四つがみられる。このような動きが、文化的資源を活用した地域活性化の姿そのものといえる。

- モチベーションの高まりや文化的資源の価値・魅力の再認識、あるいは主体的な取り組みなど、住民の間に意識の変化が生まれ、地域の活力向上や再生につながっている。
- 地域に受け継がれてきた伝統的文化の体験を通して、新たな活動の担い手や文化的素養を身に付けた次世代層の育成につながっている。
- 外部の人々との交流を通して、活動やネットワークに広がりが見られたり、不足している資源の補完や文化的資源の効果的な活用につながったりしている。
- 商品化などの収益事業に取り組むことで、継続的な保存・継承活動の下支えや、雇用機会の創出による所得の確保など、地域への直接的な経済効果が生まれている。

地域活性化の展開方策

そこで、文化的資源を活用した地域活性化の展開方策について、そのプロセスを三つに分けてみていく。

プロセス1：文化的資源の編集・加工

はじめに、「文化的資源の編集・加工」が挙げられる。これは、素材は豊富にあるものの、その価値や魅力が十分に認識されていない、地域に埋もれている文化的資源を効果的に編集・加工し、活用できる形にする、あるいは顕在化させることである。

ここで、効果的な編集・加工について示すと、次の五

つの視点が挙げられる。

■「プログラム化」：観光・教育に活用するため、文化的資源を体系化・総合化する。

■「デザイン化」：永年にわたり保存・継承されてきた文化的資源を、伝統的な本物の良さを損なわない範囲で今日的要素を加味してアレンジする。

■「物語化」：文化的資源を歴史的・社会的背景や人物と関連づけて発信する。

■「可視化」：文化的資源を地図や映像に落とししたり、復元したりして、目に見える形にする。

■「ネットワーク化」：類似のものや異質なものなど、複数の資源をつないだり、組み合わせたりする。

これらの五つの視点で編集・加工することで、新たな価値や魅力を持った文化的資源へ高めていくことができる。

プロセス2：実践的能力と下支え機能の定着

ただし、文化的資源の編集・加工と言っても、簡単にはできるものではない。その技法を地域に定着させ、道具として使いこなしていくための実践的能力と下支え機能が重要になる。

実践的能力には、「企画・デザイン力」と「情報発信力」の二つがある。企画・デザイン力は、文化的資源活用のコンセプト、ビジョン、戦略等を体系化、物語化し、その価値や魅力を内外に伝えていくことであり、情報発信力とは、文化的資源をわかりやすく効果的に伝えることである。

一方、下支え機能には、多様なセクターから協力をうまく引き出す「渉外機能」と、1人の人間として生きていくために必要な人との接し方などの社会規範を学び、地域への誇りや郷土愛を育む「教育機能」の二つがある。特に、後者については、地域社会における教育の役割・機能をあらためて見直し、再生していくことが必要である。

プロセス3：人づくりと組織づくり

そして、地域がこのような能力と機能を身に付け、文化的資源を活用していくためには、その編集・加工を担う担い手を多世代にわたって継続的に育成していく「人づくり」が不可欠である。同時に、活動の中核をなす組織体を地域につくっていく「組織づくり」も重要になる。その有効な手段・仕組みとして、ここでは「地域住民主体のメディア活動」と「中間支援組織・機能」の二つを挙げた。

前者については、「住民ディレクター」の活動を一つの試みとして紹介している。これは、ケーブルテレビ等の番組制作の経験を通して、企画力やデザイン力、関係構築力、あるいは情報発信力など、幅広い能力を身に付けた人材を地域で育成・創出するもので、民放テレビ局出身の岸本 晃さんの発案により、熊本県山江村で始まった活動である。

後者は、地域の要望に基づいて、ヒトやモノ、カネ、情報を仲介したり、関係団体相互の連携調整を担ったりすることである。

こうした人づくり、組織づくりが土台となって、文化的資源の編集・加工に求められる能力・機能を地域で高め、定着させ、地域力の向上につなげていくことできる。

これまで述べてきたプロセスを整理すると次のようになる。

編集・加工を担う人づくり、組織づくりが不可欠であり、その土台として、地域が持つべき実践的能力と下支え機能が重要になる。その上で、地域に埋もれている文化的資源を五つの視点で効果的に編集・加工し、活用することによって波及効果が生まれ、地域活性化につながっていくといえる。

文化施設の役割

最後に、これまで述べてきたことを踏まえ、本フォーラムの趣旨に照らし、文化的資源を活用した地域活性化に果たす、これからの文化施設の役割、方向性について、若干の私見を述べさせていただきます。

既に取り組んでいる施設もあると思うが、「地域に開かれた施設」「地域における文化創造・発信の拠点となる施設」「中間支援機能を持った施設」の三点を指摘したい。

初めの二点についてかみ砕いて言うと、企画展やイベントを開催して人を呼び込むだけでなく、外に開かれた施設としてスタッフ自ら積極的に地域へアプローチし、地元住民と協働する形で関わっていくことが重要ではないか。また、文化的資源を広く発信していくための拠点として位置づけると同時に、活動範囲を点から面、空間へ広げていく活動も必要である。その上で、これからの文化施設は、中間支援機能を持って地域の歴史・文化資源及び人材をよく知ることと、潜在的な地域力、文化力を引きだす担い手としてファシリテート機能を高めていくことが求められる。

文化施設の現状は、学芸員は充実しているものの、プランナーやディレクター、デザイナー、あるいは普及啓蒙や教育を担当するエドゥケーターなどのノウハウを持った人材が不足していると言われている。したがって、文化施設ではこうした人材の育成とともに、編集・加工に求められる実践的能力と下支え機能を備え、それを地域全体へと波及させる先導的役割を果たしていくことが重要になる。

すなわち、地域住民が編集・加工に関わる能力や機能を身に付けていくことは不可欠であるが、その前段階として、文化施設が先導的役割を担いながら地域に還元していくプロセスが大切であり、人づくり、組織づくりの中核としての役割が、文化施設には求められている。